日蓮大聖人御書全集

べんどののごしようにそく

弁殿御消息

していどうしん

いの

こと

(師弟同心の祈りの事)

新版
1636
〜
1638

べんどのべんどうししょうそく

していどうしん

いの

こと

弁殿御消息 (師弟同心の祈りの事)

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

にっしょう

建治2年('76) 7月21日

55歳

日昭

滝 王

家 葺

由 そうら

たきおうをば、いえふくべきよし候いけるとて、まかる

もう

そうら

遣

そうら

べきよし申し候えば、つかわし候。

右 衛 門 大 夫 殿

替

銭

だいしんのあじやり

えもんのたゆうどののかえぜにのことは、大進阿闍梨の

文

そうら

ふみに候らん。

いち

じゆうろうにゆうどうどの

おん袈裟

よろこ

い

そうら

由

語

一、十郎入道殿の御けさ、悦び入って候よし、かた

たま

らせ給え。

いち

三

郎

左 衛 門

殿

ひと

遣

一、さぶろうざえもんのこのほど人をつかわして

そらら

仰

そらら

返

返

覚

候いしが、おおせ候いしこと、あまりにかえすがえすおぼ

東

そらら 由

おん 渡

聞

書

つかなく候よし、わざと御わたりありて、きこしめしてか

遣

そらら

左衛門 殿

そらら

きつかわし候べし。また、さえもんどのにも、かくと候

え。

河野 辺 殿 とう しにん

承

そらら

かわのべどの等の四人のこと、はるかにうけたまわり候

へん 何 ごと

そらら

いちいち

書

わず。おぼつかなし。かの辺になに事か候らん。一々にか

遣

たびたび

ひとびと

殊

いちだいじ

てん

責

きつかわせ。度々この人々のことは、ことに一大事と天をせ

そらら

ごしよう

こんじよう

めまいらせ候なり。さだめて、後生はさておきぬ、今生

験

そらら

ぞん

由

強

語

にしるしあるべく候と存ずべきよし、したたかにかたら

たま
せ給え。

いとうはちろう 左衛門 いま 信濃 守 現 死

伊東八郎ざえもん、今はしなののかみは、げんにしにた

祈 活 ねんぶつしやとう ねんぶつしや しんごんし 由 みようしようぼう

りしを、いのりいけて念仏者等になるまじきよし明性房

送 ねんぶつしや しんごんし むけん

におくりたりしが、かえりて念仏者・真言師になりて無間

じごく お 能登ぼう 現 み方 そうら せけん

地獄に堕ちぬ。のと房は、げんに身かたで候いしが、世間

恐 もう 欲 もう にちれん 捨

のおそろしさと申し、よくと申し、日蓮をすつるのみなら

敵 そうら 少 輔 ぼう

ず、かたきとなり候いぬ。しよう房もかくのごとし。

ずいぶん にちれん 方 人 脳

おのおのは随分の日蓮がかとうどなり。しかるに、なずき

碎 祈 験 なか

をくだきていのるに、いままでしるしのなきは、この中に

こころ 翻 ひと あ 覚 そうろう 思 合 ひと

心のひるがえる人の有るとおぼえ候ぞ。おもいあわぬ人

祈 みず うえ ひ 焚 そら 家 造

をいのるは、水の上に火をたき、空にいえをつくるなり。

よし しにん 語 たも 蒙 古 合

この由を四人にかたらせ給うべし。むこり国のことのある

思 にちれん とが

をもつておぼしめせ。日蓮が失にはあらず。

筑 後 ぼう さんみ 帥 とう 暇

ちくご房・三位・そつ等をば、「いとまあらば、いそぎ来

だいじ ほうもんもう 語 たま

るべし。大事の法門申すべし」とかたらせ給え。

じゅうじゅうびばしやとう ようもん だいちよう そうろう しんごん おもて

十住毘婆沙等の要文を大帖にて候と真言の表の

消 息 うら 佐 渡 ぼう 書 そうろう 総

しようそくの裏にさど房のかきて候と、そうじてせせと

書 付 そうろう 軽 取 給 そうら しみ

かきつけて候もののかろき、とりてたび候え。紙なくし

て いっし 一紙 たにん に多人 もう のことを申すなり。

しちがつにじゅういちにち

七月二十一日

べんどの

弁殿

日蓮 にちれん

花押 かおう